



# 先生のための哲学カフェ

## 第1回

# こんな時代だからこそ 子どもと一緒に哲学を

とある中学校でのひとコマ

西山「会ったこともない、どこか遠くの国の貧しい人を助けるべきかな？」

生徒A「見たことも会ったこともない人を助けるなんて想像できないし、本当に助かっているのかもわからない」

生徒B「その人がギャングかもしれないし、見境なく助けるのはリスクがある」

生徒C「でも、それが友達や家族だったら、遠くても助けたくなるかも」

西山「家族や友達と、まだ会ったことない知らない人は、何が違うんだろう？」

哲学、始めてみませんか？

大人だけでなく子どもたちもコスパ（コ

ストパフォーマンス）やタイムパフォーマンス）を考えながら日々を過ごす時代になっています。最も適切な答えを、いかに手間をかけずに導くかというところに、多くの人がのめり込んでいるように見えます。

哲学はある意味で、こうした時代の流れに抗おうとするものです。哲学は、世界が複雑であるということを受け入れるための実践です。一見すると簡単に見える問題でも、よくよく考えるととても複雑で入り組んでいて、答えも1つとは限りません。このことを、哲学は教えてくれます。

先ほどの中学生とのやりとりを考えてみましょう。学校では「貧困をなくそう！」「貧しい国の人に支援を！」と教えることが多いですが、中学生たちが言うように、会ったことも行ったこともない

国の人に対してどうやって共感するかは、なかなか難しい問題です。

哲学は、どれだけ考えても答えが出ない、すぐに役立つ答えが出るとは限らないので、「コスパもタイムも悪い」かもしれない。それでも、私たちが本当は頭の片隅で感じていた世界の複雑さと、もう一度ゆっくり、じっくり向き合ってみようとする取り組みが、哲学です。

哲学、子どもとやっています

今、哲学を導入している日本の学校が次々と増えています。哲学といっても、



開智国際大学教育学部専任講師  
関西大学法学部研究所嘱託研究員

## 西山 溪

にしやま けい 学校内外での子どもの政治経験や、対話型の民主主義教育に関する研究と実践をしています。映画『ぼくたちの哲学教室』日本語字幕監修。

プラトンなどの難しい思想を教えるものではないです。冒頭のやりとりにあるように、学校で行う哲学では、子どもたちと一緒に「愛とは?」「友達とは?」「貧しいとは?」などという哲学的な問いについて考えるものです。対話をしながら哲学的に考えるこうした取り組みは、しばしば「哲学対話」とも呼ばれています。

アクティブ・ラーニングや探究型学習が広まる一方で、子どもたちの意見がどうも表面的であるとか、本心から言っていないように思えないといった悩みをよく聞きます。そんなとき、子どもたちにも一度課題に向き合わせ、しつこく考えることを促し、思考のレベルを一段階掘り下げるためにも、哲学対話は有効です。

でも私は、学校で哲学対話をするものの最大の面白さは、子どもたちをいつものとほまったく異なる観点から見ることができると思っています。テストなどでよい成績をとる「優秀な子」が、哲学でも同じように優秀であるとは限りません。むしろテストという基準には乗っていないような子が、答えが1つで

はない問いについて考える哲学では、水を得た魚のようにきわめて哲学的で面白い発言をすることもあります。

あるいは、哲学的な問題についての思索を通して、子どもたちの新たな側面に気づくこともあります。例えば小学校で哲学対話をしたとき、普段はほとんどしゃべらない女の子が「人が生まれる前には時間ってあったのかな?」とポツリとつぶやき、担任の先生を大いに驚かせていました。哲学の問いの前では「コスパやタイパよく生きる」ことよりも、時間をかけてでも、どれだけ真剣に問いに向き合うかのほうが大事になるのです。



### 哲学、どうやってやるの?

「なるほど。じゃあその哲学対話とやらは、どうやってやるんだ?」と思う人もいるでしょう。この連載は、そうした人のために書いていこうと思います。ここでは、「やってみたいけど、まず何をやるの?」「試しにやってみただけ、うまくできていないかわからない」「デイベートっぽ

くなってしまおう」「マンネリ化してしまおう」といったような、私自身がこれまで現場の先生から受けたさまざまな質問を下敷きにして書いていきます。

少しだけ、これから先どんなことを書いていくかを紹介しましょう。まず、よい問いの立て方、問いのほぐし方など、哲学対話の中心となる「問い」について考えます(第2回・第3回)。次に、多くの教育活動で見られる「人それぞれ」という言葉、「拍手」「名前を呼ぶ」「沈黙」「まとめ」などについて、哲学対話の観点から考えていきます(第4〜8回)。第9回と第10回では、海外の事例を紹介します。第11回は哲学対話をカウンセリングに応用した実践、第12回は「もっとわからなくなる」と「なぜ素晴らしいかを述べていこう」と思います。

こんな時代だからこそ、大人も子どもも自分の生き方や価値観と向き合うことが必要です。この連載が先生方にとって、多忙さからちよっと離れてコーヒーを片手にほっと一息、自身の教育観や生き方を見つめる時間になりますように。